血液像検査の至急対応により血液疾患の早期診断に至った 2 症例

◎吉川 穂乃花 [1)]、加藤 香代子 [1)]
社会福祉法人 京都社会事業財団 京都桂病院 [1)]

【はじめに】血液疾患は主症状に乏しいものもあり、発見が遅れることも稀ではない。今回、健康診断と救急外来において血液像を実施したことで血液疾患の早期診断に至った 2 症例を経験したため報告する。

【症例 1】60 歳代男性。健康診断のため、当院で採血を実施した。WBC 12.23×10^9/L, RBC 3.24×10^{12}/L, Hb 9.7 g/dL, MCV 94.8 fL, Plt 51×10^9/L であり、白血球増多と貧血、血小板の著減を認めた。1 年前の検査結果と比べ著変しており血液疾患を疑ったため、白血球分画を含まない CBC のみの依頼であったが血液塗抹標本を作製した。血液像では隆起性の核形不整を伴う小型～中型の異常リンパ球を 39.0 %認めた。担当医に至急連絡したところ CT でも著名な脾腫、全身の多発リンパ節腫大が認められていた。当日中に血液内科に紹介となり、FCM などの追加採血を行った。後日リンパ腫疑いにて骨髄穿刺・生検を行い、治療のため入院となった。

【症例 2】20 歳代女性。出産後からの腰痛と手足のしびれ、腹痛を主訴に他院通院中であった。精査目的で当院の脊椎脊髄外科で検査を行ったが診断がつかず、複数科で外来対応中であった。しかし痛みが増強したため早朝に救急外来を受診されたが、CT やレントゲン、腹部エコーでは特に異常所見は認められなかった。採血でも WBC 7.38×10^9/L, RBC 4.42×10^{12}/L, Hb 11.3 g/dL, MCV 80.1 fL, Plt 282×10^9/L であり、血液疾患を疑う結果ではなかった。当直帯では血液像を基本実施していないが早朝 5 時以降に提出された検体であったため、日勤検体として血液塗抹標本を作製すると N/C 比 90%以上で核小体や核形不整を伴う不明細胞を 8.0%認めた。救急担当医に至急連絡したが患者はすでに帰宅していたため、再来院され当日中に緊急入院となり骨髄穿刺・生検を行った。

【まとめ】今回の 2 症例では、どちらも血液像で血液疾患を明らかに疑う細胞を認めた。これらの経験により血液像が血液疾患の早期診断に有用であると再確認することができた。また異常値に遭遇した際の適切な対応について再考し、日勤帯や時間外での血液像の対応やシステムを見直す良い機会になった。吉川穂乃花-090-6828-3453